悲劇詩人における -sis 名詞の用法

柳 沼 重 剛

1

-sis 名詞とは勿論、本来いわゆる nomen actionis として動詞から——動詞幹に -sis という接尾辞をつけることによって——派生した抽象名詞である。実は私が意図しているのは、-sis ばかりでなく、同じく動詞から派生する -ma、あるいは形容詞に発する -ia というような抽象名詞の使い方を、古典ギリシアの文献すべてについて調べることなのであるが、今それを -sis のみに限ったのは、ひとえに時間と紙の制約のためであって他に理由はない。対象を悲劇のみに限ったのもほぼ同じ理由からで、悲劇に特別の -sis 名詞の用法を期待しているわけではない。参照するだけなら、前4世紀はじめまでの代表的作家ということにする。韻文ならばアリストパネースの喜劇まで、散文ならプラトーンやクセノポーンの作品までである。

また、私が調べたいと思っているのは、語形論や語彙論の立場からではなく(それならすでに十分な成果が挙げられていて、主要な文法書を見れば詳しく学ぶことができる[1])、Syntax 上の問題である。もう少し詳しく言えば、この抽象名詞の 'periphrastic' な使い方、つまり、この抽象名詞の派生源になっている動詞を(場合によっては使えば使えるのに)使わずに、この抽象名詞と他の動詞で句を成して clause と同じ機能を果させたり、前置詞を伴って副詞節の機能を果させたりしているような文例である。例を挙げよう。ホメーロスの『イーリアス』第2巻380でアガメムノーンが言う、「もし我らが心を一にして計りめぐらすならば、*οὐκέτ' ἔπειτα Τρωσὶν ἀνάβλησις κακοῦ ἔσσεται.*」つまり「トロイア軍に禍の猶予はないであろう、」つまり「トロイア軍に対して禍(の訪れる日)を遅らせはすまい、」もっと翻訳らしく言えば「一時の猶予もあらせず禍を贈ることになろうよ。」*ἀνάβλησις* の元の動詞は *ἀναβάλλω* だが、ホメーロスはこの動詞の方をもよく使っている(ただし普通は中動相で)。それの例も

挙げておくと、今の箇所の少しあとの所で (*Il.* 2. 436) ネストールがアガメムノーンに全軍の勢揃いを熱心に進言しつつ、「もはやこれ以上議論するのはよそう、*μήδ' ἔτι δηρὸν / ἀμβαλλώμεθα ἔργον.*——もういつまでも仕事を延ばすのもやめよう。」もちろん詩だから韻律ということがある。ホメーロスだから決まり文句ということもある。しかし意味だけなら、*ἀνάβλησις οὐκ ἔσσεται* と言っても *μὴ ἀμβαλλώμεθα* と言ってもそれほど違わない。——アイスキュロス『アガメムノーン』1299 で、カッサンドラーが「逃れるすべはありません」(*οὐκ ἔστ' ἄλυξις*)」と言っているのは、例えばホメーロス『オデュッセイアー』19. 558 で *οὐδέ κέ τις θάνατον καὶ κῆρας ἀλύξει.* と言われているのと実質的には同じである。勿論、*οὐκ ἔστ' ἄλυξις* と言えば非人称で、非人称だから、今、誰それが、逃げることができない、と言っているのではなく、一般論として、(かかる状況の下では)誰にとっても、逃げるすべというものは、およそ、ない、という意味合いになる。これは話し手の状況認識のあり方や話し手の気持の表し方として重要で、だから読む側がそれをいい加減にすませてはいけない、ということもそのまま認める[2)]。しかし実質的には同じだとは言えるだろう。

所で、今の *θάνατον καὶ κῆρας ἀλύξει* だが、実はこの *ἀλύξει* という述語動詞は、ホメーロスの決まり文句では *ἀλύξαι* というアオリストの不定詞にする方が慣例で、例えば『イーリアス』21. 565: *οὐκετ' ἔπειτ' ἔσται θάνατον καὶ κῆρας ἀλύξαι* というのがあるが、ここまで来れば、この不定詞 *ἀλύξαι* を -sis 名詞 *ἄλυξις* に置換え、そうなれば当然目的語 *θάνατον καὶ κῆρας* は *θανάτου καὶ κηροῦ* と属格にするのはもう一歩のことになる。動詞から派生した抽象名詞のはたらきは、不定詞と重なる部分が多いのである。

前置詞と結びついて副詞節相当句を成す例としては、今はアイスキュロス『アガメムノーン』826 の *ἀμφὶ Πλειάδων δύσιν* は「プレイアデスが沈む頃」という意味だ、というのを一つだけ挙げておくに止める。

以上のような次第だから、私が今やろうとしていることは、日本語で、「こわれた」と言うのと「破損が生じた」と言うのを比較するようなもので、「こわれた」と言えばすむ所を「破損が生じた」と言っているのか、「こわれた」と言ったのでは不十分で「破損が生じた」と言わなければいけないのかを考えるのに似ている。この際どちらかと言えば「こわれた」の方が話し言葉風で、「破損が生じた」の方が書き言葉風であるのと同様、ギリシア語でも、単に動詞を使うよりは抽象名詞を含む句を使う方が書き言葉風のはずであり、ならば、口語的表現を多量に含むと言われている喜劇には、この -sis 名詞の用例は少ない

はずだという予測が立つ。

2

以上のことを頭において、まずとりあえず各作家がどれぐらいの語数の -sis 名詞を使っているかを示したのが下の表である。これは語数の表であって延べ語数(言い換えれば -sis 名詞が使われている箇所の数)ではない。それは註(4)に示してある。

ホメーロス	37	(158)
抒情詩人	49	
アイスキュロス	46	
ソポクレース	55	(58)
エウリーピデース	82	(153)
アリストパネース	43	(86)
……		
哲学者たち	245	
ヘーロドトス	111	
トゥーキューディデース	195	(83)
プラトーン	351	(374)
クセノポーン	95	(172)

説明を加える。抒情詩人は、現在刊行されているどの版によっても、一つの版で全部を覆えないので、Georgios Fatouros, *Index verborum zur frühgriechischen Lyrik* (Heidelberg, 1966) によって数えた。哲学者たちとはソークラテース以前の哲学者を指し、従って Diehls-Kranz, *Fragmente der Vorsokratiker*[8] (Berlin, 1952) によっている。他は全部 Oxford Classical Text (OCT) による。

括孤内の数字についても一言しておく。中央の点線から上、つまり韻文による作家たちに関して言えば、アイスキュロスを基準にして、アイスキュロスが46語の -sis 名詞を使っている(断片を含む現存作品の中で)のに対して、各作家がもしアイスキュロスと同じような -sis 名詞の使い方をしたら何語の -sis 名詞を使うはずであるかを示している。勿論これはほんの目安以上の意味を持ってはいないけれども、目安としては役立つだろう。計算は次のようにしてある——OCT でホメーロスは27,803行、アイスキュロスは8,116行、ソポクレースは10,341行、エウリーピデースは27,035行、アリストパネースは15,288行あるが、今仮にアイスキュロスの行数を1とすると、ホメーロス=3.43、ソ

ポクレース=1.27、エウリーピデース=3.33、アリストパネース=1.88となる。そしてこれを係数としてアイスキュロスの46に掛けたのが括孤内の数字である。勿論叙事詩と悲劇・喜劇では同じ一行でも長さが違うからそこに含まれる語数も違うが、それには目をつぶることにした。——そこでホメーロス(158)というのは、もしホメーロスがアイスキュロスと同じように-sis名詞を使うとしたら、彼は158語使うはずだということであり、ソポクレースは58、エウリーピデースは153、アリストパネースは86の-sis名詞を使うことになるはずなのである。そこでホメーロスが(158)に対して実数37というのは、ホメーロスはアイスキュロスに比べると大変に-sis名詞の語彙が少い、4分の1以下に止まる、ということである。

散文ではやはりOCTでヘーロドトスが848頁、トゥーキューディデースが636頁、プラトーンが2,873頁[3]、クセノポーンが1,315頁である。仮にヘーロドトスの頁数を1とすると、トゥキューディデース=0.75、プラトーン=3.39、クセノポーン=1.55となり、これを係数としてヘーロドトスの111に掛けたのが括孤内の数である。

抒情詩人と哲学者たちについてこの計算がなされていないのは、抒情詩はOCTが「選集」にすぎず、哲学者たちにはOCT版がないからである。

この表を一見してすぐ気がつくことは、韻文よりは散文の方が多数の-sis名詞を使っているようだということで、これは基本的な認識である。次に、先にもちょっと触れたように、ホメーロスの-sis名詞の語彙はかなり少い(だから重要でないとは決して言えない)ことがはっきり分る。エウリーピデースがアイスキュロスとの対比では153だのに実数が82というのも思いの他少い。思いの他というのは、エウリーピデースという人は悲劇にいろいろと新しい試みをし、用語や文体にもそれが見られる人なのに、そのエウリーピデースにしては、という意味である。アリストパネースに-sis名詞が少いのは案の定と言うべきだろう。——散文では、トゥーキューディデースがヘーロドトスの倍以上(比率において)の-sis名詞を使っていることと、プラトーンが実数ではかなりの数の-sis名詞を使っていても、ヘーロドトスとつき合せてみると、想像するほど多くはない、というのが注目を惹く。クセノポーンはこの時代の散文家としては-sis名詞の語彙が少なすぎるのではないかと怪しまれる[4]。

なお、以上の作家たちに用いられた-sis名詞の総数(延べ数ではない)は745語である。一方、P. Kretschmer, *Rückläufiges Wörterbuch der griechischen Sprache*[3] (Göttingen, 1962) に記載されている-sis名詞の数は約4,600に上

る。この中には Liddell-Scott-Jones の辞書にさえ載っていない語も少からずあるとは言え、今我々が上に挙げた -sis 名詞(これらはすべて紀元前4世紀のはじめまでに使われたことがあると確認できる語である)が745に対して4,600とは余りにも多い。ということは、-sis 名詞というものは如何に前4世期以降に大量に生産されたものかを示している。もっとも、その造語法を見ていると(これを見るのに最も良い手引は何と言っても今挙げた Kretschmer の辞書)、とめどなくと言いたくなるほどぞろぞろと造られたと思えて来る。例えば *αἱρέω* という動詞(これはホメーロスにもすでにある)から *αἵρεσις*(中動相に基く「選択」という意味ではピンダロス、能動相に基く「奪取」という意味ではヘーロドトスが初出)ができ、それに接頭辞のついた *διαίρεσις*(アイスキュロス)、*ἐξαίρεσις*(ヘーロドトス)、*ἀναίρεσις*(エウリーピデース)、*ἀφαίρεσις*(ヒッポクラテース)、*καθαίρεσις*(デーモクリトス)ができ、ここまでは前5世紀だが、この後 *ἀνθαίρεσις*, *περιαίρεσις*, *συναίρεσις*, *προαίρεσις*, *παραίρεσις*, *ὑφαίρεσις* と、主要な接頭辞はみな動員された感があるが、それでもまだ止まらずに *ἀναίρεσις* にもう一つ *ἐπι-* をつけて *ἐπαναίρεσις*, *διαίρεσις* に *κατα-* をつけて *καταδιαίρεσις* 等々と作られつづけ、こうして接頭辞を冠することによって出来た *αἱρέω* からの -sis 名詞は22箇にまで及んでいる。ここまで来ると些か滑稽で、と言っては不謹慎なら、少くとも新語の造り方がやや安直に過ぎるという感じは免れない、と言える[5]。

しかしここで是非共つけ加えておかなければならないことが一つある。それはプラトーンの -sis 名詞についてで、上で私はプラトーンの -sis 名詞の語彙が意外に少いと驚いたのだが、註(4)に見る如く、その使用箇所数というのは断然他を圧して多く、ヘーロドトスの3倍以上の頻度でこれを使っている。所で、その351語の中、詩でも使われていたものは約50語しかなく、残りの300語は散文専用語彙であり、しかもその半数以上はプラトーン初出の語だということは覚えておかなくてはならない。ここから察しがつくことは、プラトーンの -sis 名詞は様々の行為や状態を概念化するために次々に造られて行ったということである。——このことを頭に入れておいて今度はプラトーンの -sis 名詞の箇所数、使用回数を調べてみると、これが計4,039にもなった最大の理由はすぐ分る。というのは、*φύσις* という一語を取ってみても、この一語だけで何と826箇所も占めている。これでは -sis 名詞全体の使用箇所数は膨れ上るわけで、この他に *αἴσθησις*, *γένεσις*, *κίνησις*, *ὄψις*, *πρᾶξις*, *τάξις*, *φρόνησις*(これらはみな100箇所以上に現れる)、*ἀπόκρισις*, *ἕξις*, *κρίσις* *κτῆσις*, *οἴκησις*, *ποίη-*

σις (これらは 50 箇所以上に現れる)、それと先の φύσις とを合せてみると、4,039 箇所の過半数はこの 14 語で占められていることが分る。これらの語はすべてプラトーンの思考の中心にある概念を表す語であり、基本的な概念だから何度でも使われる。そしてここからもまた言えることは、前 4 世紀以降 -sis 名詞の語彙が非常に多くなったについての最大の理由は、概念をより正確に言い表わすための新語、もしこれが医学のような専門分野ならばその専門用語として、-sis 名詞がどんどん造られたということにある。つまり語彙の増大は新しい概念の成立に応じたのであって、-sis 名詞、あるいは一般に抽象名詞の用法の幅には殆ど関係がないのではないかと疑われて来る。私の見当では、もし一人の作家が一つの -sis 名詞を、韻文なら 5 回以上、散文なら 10 回以上使っているとしたら、その -sis は概念を表す語で、私が以下で調べようとしている動詞的な要素を含んでいることはまずないと考えても安全である。[5a] そこで本論に入る。

3

はじめにも断わったように、clause 相当句を成す -sis 名詞のみをここでは拾う。その際、

A 1: -sis が copula ないしはそれに類する動詞 (εἰμί, γίγνομαι, ἔρχομαι など) の主語になっている場合。

A 2: -sis が一般の動詞の主語になっている場合。

A 3: -sis が文法上の要求から斜格になっている (例えば不定法の意味上の主語の対格) が、意味の連関から言えば主語的だというもの。

B 1: -sis が Long の言う 'Auxiliary Verbs' (例えば ποιέω や τίθημι) の目的語になっている場合。

B 2: -sis が一般動詞の目的語になっている場合。

B 3: 前置詞を伴って自動詞にかかっている場合。例えば εἰς～-σιν ἔρχομαι というように。

B 4: 属格支配、与格示配の動詞・形容詞の目的語で、意味の上では B 2 に等しい場合。

C: 副詞節相当句 (殆どの場合前置詞を伴って)

D: -sis 名詞自身が属格となって他の名詞にかかって、A または B に準ずる意味を持っている場合。

という分類を当てはめてみることにする。

まずアイスキュロス。

1. *ἄγκρισις*: *Eum* 364. *μήδ' εἰς ἄγκρισιν ἐλθεῖν.* 早速ながらこれなどはここに取上げるべきかどうか微妙な所で、*ἀνακρίνω* がすでに法律用語だから *ἄγκρισις* は当然法律用語であり、法律用語ならばすでに概念として成立しているわけであり、その上出典が『エウメニデス』とあっては、もう間違いなく用語に決っているが、それでもとにかく *ἀνακρίνω* を使わずに *εἰς ἄγκρισιν ἐλθεῖν* と言っているから B 3。

2. *αἵρεσις*: *PV* 779. *αἱρεσιν τ' ἐμοῦ δίδου. αἱρεῖσθαι* あるいは *ἑλέσθαι* という不定法による構文も可能な所だが、アイスキュロスにはその例はない。B 1。

3. *ἄλυξις*: *Ag* 1299. これは92頁に引合いに出した箇所[6]。この語は古典期ではこれが唯一の使用例。あとは Quintus Smyrnaeus に現れるのみ。A 1。

4. *ἅλωσις*: *Ag* 589. *φράζων ἅλωσιν Ἰλίου καὶ ἀνάστασιν.* これは B 2 として問題ないだろう。

5. *ἀνάστασις*: 上記と同じ。

6. —— : *Per* 106*.[7] *ἐπέσκηψε Πέρσαις . . . / πόλεών τε ἀναστάσεις. ἀνίστημι* する都市が複数なので *ἀνάστασις* も複数になっているが、これは *ἀνιστάναι* あるいは *ἀναστῆναι* という不定法と同じはたらきをしているので B 2。

7. —— : *Eum* 648.「死に行く兵の血を土が吸ったなら、*οὔτις ἔστ' ἀνάστασις.*」上記 No. 5 の *ἀνάστασις* よりこの方が語源に近い意味を持っていて、一旦死んだ人間を *ἀνίστημι* させることはできないのだと言っていて A1。しかしこの際、*ἀνίστημι* させることはできない、という言い方をするならどうしても1人称か2人称の複数、要するに人称表現をすることになろうが、それを *ἀνάστασις* はあり得ないのだと非人称で言うと、ずっと端的な表現になることは間違いない[8]。

8. *ἄρηξις*: *PV* 546.* *τίς ἐφαμερίων ἄρηξις*;「一日限りの者（人間）からどんな救いがあるのです?」と日本語にして「救い」なら既成概念だととれば、ここで取上げるには及ばない。それなら「人間からどう救われるのです?」と日本語にしたらどうなる? *ἔστι* を補って A 1。

9. *ἀτίμωσις*: *Cho* 435*. *πατρὸς δ' ἀτίμωσιν ἄρα τείσεις.* この *πατρός* は目的語的属格、「父上を *ἀτιμάω* したこと。」B 2。

10. *διαίρεσις*: *Eum* 749. *τὸ μὴ ἀδικεῖν σέβοντες ἐν διαίρεσει.* この語は韻

文ではこの箇所一箇所限り、散文ではヘーロドトス以後それこそ頻りに用いられる。従って現存する文献ではこれが初出ということになるが、現存する文献ではこれが初出でも、これ以前に「開票」という用語として成立していた可能性もあるわけだが、一応C。

11. *δόσις*: *Ag* 826. 先に92頁で例示したもの。C.

12. *ἔκβασις*: *Sup* 771*. *οὔτω γένοιτ' ἂν οὐδ' ἂν ἔκβασις στρατοῦ.* 問題なく A 1。

13. *ἐπίλυσις*: *Sept* 132*. *ἐπίλυσιν φόβων, ἐπίλοσιν δίδου.* 韻文、散文を通じて、前4世紀初まででではこれが唯一例。B 2。

14. *κατάστασις*: *Ag* 23. *πιφαύσκων καὶ χορῶν κατάστασιν πολλῶν ἐν Ἄργει τῆσδε συμφορᾶς χάριν.* *χόρος* を *καθίστημι* させるというので、B 2。

15. *λῆξις*: *Eum* 505. *λῆξιν ὑπόδοσίν τε μόχθων / . . . παρηγορεῖ.* *μόχθη* が *λήγω* し *ὑποδίδωμι* したことを . . . というので B 2。*λῆξις* はあとピンダロスに一度現れるのみ。

16. *ὄνησις*: *Ag* 350. *πολλῶν γὰρ ἐσθλῶν τὴν ὄνησιν εἱλόμην.*「多くのよいことを *ὀνίνημι* することを選んだ」ので B 2.[9]。この語はホメーロス以来の詩語。散文ではプラトーンに前後4度見られるのみ。ただし clause 相当句を形成する名詞として用いられたのはこれが最初。

17. *παραίνεσις*: *Eum* 707. *ταύτην μὲν ἐμοῖς παραίνεσιν / ἀστοισῖν.* 動詞が *ἐκτείνω* だから、例えば *παραίνεσιν ποιήσασθαι* (Hdt 2.88) などと言うより「あまねく忠告する」のか「長々と忠告する」のか、とにかく忠告の仕方に何らかのニュアンスが加わることは確かだが、いずれにせよ *παρῆνεσα* と言える所を *παραίνεσιν ἐξέτεινα* と言っているので B 2。(cf. *Cho* 903: *παραινεῖς μοι καλῶς.*)

18. *πρᾶξις*: *Pers* 739. *ταχεῖά γ' ἦλθε χρησμῶν πρᾶξις.* *πρᾶξις* という語そのものはむしろこれより後の時代に盛に使われるようになるが、このように *ἔρχομαι* あるいは *γίγνομαι* (*Oa* 10.202=10.568) と結びついて「実現された結果」を意味する例はむしろ前5世紀以前に限られるようである。A 1。

19. *στάσις*: *PV* 1087. *εἰς ἄλληλα στάσιν ἀντίπνουν.* アイスキュロスは *στάσις* を11箇所で用いているが、辛うじてにせよ clause 相当句をなしている *στάσις* はここだけ。B 3。

20. *σύνθεσις*: *PV* 460. *ἐξεῦρον αὐτοῖς γραμμάτων τε συνθέσεις.* プロメーテウスが「俺は人間たち文字を *συντίθημι* して語を作る方法を見つけてやっ

た」と誇っている。文字を *συντίθημι* する仕方はいろいろあるから *συνθέσεις* と複数になっているが、この -sis は不定法で置換え可能。B 2。

21. *ὑπόδοσις*: *Enm* 505. No. 15 と同一箇所。*ὑπόδοσις*、意味は *λῆξις* と同じと見てよいが、これが韻文散文を通じての唯一例。しかも派生源たるべき動詞 *ὑποδίδωμι* は、ずっと後アリストテレースにはじめて現れる。B 2。

アイスキュロスの clause 相当句に用いられた -sis 名詞は以上の通りである。彼の作品に現れる -sis 名詞 46 語 94 箇所のうち、19 語 21 箇所である。94 箇所中 21 箇所だから、-sis 名詞の約 22% をアイスキュロスは clause 相当句に用いていることになる (参考までに挙げると、ホメーロスではこの比率は約 23% である)。そして以上の内訳は、A 1=5, B 1=1, B 2=11, B 3=2, C=2 であった。

念のためにここから洩れた -sis 名詞を列挙して、ごく大まかな説明を加えておく。——*Sup* 976*, *Ag* 10, 477 の *βάξις* (この語はつねに「言葉」「噂」「知らせ」と具体的)——*Cho* 452* の *βάσις* (*φρένων βάσει* で「心の底に」)——アイスキュロスに 7 回現れる *δόσις* (全部「賜物」「恵み」で giving の意なし)——*PV* 262 の *ἔκλυσις* (*ἄθλου δ' ἔκλυσιν ζήτει τινά.* これはどうしても「逃れること」ではなく「逃れるすべ」なので、少からず迷いながら (目的格的属格 *ἄθλου* がついているから) 捨てる)——*Per* 606 の *ἔκπληξις*, *Ag* 945 の *ἔμβασις*, *Sept* 30, 158 の *ἔπαλξις*.——*Ag* 381 の *ἔπαλξις* (一見 A 1 に見えるが、「胸壁」としての *ἔπαλξις* を比喩的に使ったもの)——*PV* 480 の *κρᾶσις* (*ἔδειξα κράσεις ἠπίων ἀκεσμάτων.* 迷い方、捨て方において上記 *ἔκλυσις* の場合と全く同じ)——*Ag* 1288 の *κρίσις*.——*PV* 445 の *μέμψις* (苦情を言うことではなくて苦情の種)——*Sept* 235* の *νέμεσις* (この語は観念、時に女神としてしか現れない)——*Sup* 1009 の *οἴκησις* (=*οἴκημα*)——アイスキュロスに 11 回現われる *ὄψις* はつねに具体的。「様子」「顔つき」「視野」「幻」など——*Sup* 715 の *παράρρυσις* と *Ag* 556 の *πάρηξις* は共に船体の付属品や部分。——*Cho* 578 の *πόσις* (「飲物」ホメーロスを除けば散文にしか現れない)——*Sept* 466 の *προσάμβασις* (*κλίμακος προσαμβάσεις* だけなら採るが、ここでは *στείχει* という動詞の目的語となっていて、*κλίμακος προσαμβάσεις* で「梯子」を意味するらしいので捨てる)——*PV* 488 の *πτῆσις* は、*Sup* 273, 615, *Ag* 1322 の *ῥῆσις*, *Ag* 886 の *σκῆψις*, アイスキュロスに 11 回現れる *στάσις* (上記 No. 19 のものを除く) と共に、具体的なるが故に省く。以下 5 回現れる

τάξις, 3回現れる *τέρψις*, *Sup* 368 の *ὑπόσχεσις*, 5回現れる *φύσις*, *Cho* 97 の *χύσις* を省く理由は説明を要しない。

4

次はソポクレース。

1. *αἵρεσις*: *Aj* 265. *ποτέρα δ' ἄν, εἰ νέμοι τις αἵρεσιν, λάβοις*; 不定法で置き換え可能。B 2。

2. *ἅλωσις*: *Tra* 288. *ἀγνὰ θύματα | ῥέξῃ πατρῴῳ Ζηνὶ τῆς ἁλώσεως*. この *ἅλωσις* はいわゆる原因を示す属格で、「*ἁλίσκομαι* した故に」C。

3. —— : *Phi* 61. *μόνην ἔχοντες τήνδ' ἅλωσιν Ἰλίου*.「イーリオンを陥す手だてはそれしかなかったので。」cf. Webster *ad loc.* B 1.

4. *ἀνακούφισις*: *OR* 218. *ἀλκὴν λάβοις ἂν κἀνακούφισιν κακῶν*.「禍から救われるであろう」で B 2。この語の唯一例。

5. *ἀνάλυσις*: *El* 142*. *ἐν οἷς ἀνάλυσίς ἐστιν οὐδεμία κακῶν*. この関係代名詞 *ἐν οἷς* を受ける明確な先行詞はないから、恐らく上の文全般を指していて「そういうことになれば」(Jebb *ad loc* を参照)。「(そうなれば)不幸から救われることもなく」A 1。この語がこの意味で使われているのも、韻文に現れるのもこれが唯一の例。あとはアリストテレースに「分析」の意味で使われるまで用例なし。ただし動詞 *ἀναλύω* はこの意味でも韻文でも広く使われている。従ってこの *ἀνάλυσις* には動名詞的な気持がかなり強いと見る。

6. *ἄρηξις*: *El* 876. *πόθεν δ' ἂν εὕροις τῶν ἐμῶν οὐ πημάτων ἄρηξιν*; これは採用するかどうか、甚だ微妙な所だが、目的格的属格もついていることだし概念と見るには多少困難があるので辛うじて B 2。「私の *πήματα* 救済法」と読んで捨てる人もあろう。

7. ——: *OC* 829. *ποῖαν λάβω θεῶν ἄρηξιν ἢ βροτων*; 上記と全く同じ。B 2。

8. *ἄρκεσις*: *OC* 73. *καὶ τίς πρὸς ἀνδρὸς μὴ βλέποντος ἄρκεσις*;「目の見えない人からどうか助けて貰うのかね」A 1。これも -sis+(*ἐστί*) の形をとったために「一体どんな助けがあり得るのか」と強勢が加わった。

9. *βάσις*: *Tra* 964*. *ξένων γὰρ ἐξόμιλος ἥδε τις βάσις*. A 1. *βάσις* は3回現れるが、そのうちこの1箇所のみ、Long, *op. cit.*, 73 f. のみごとな分析に従って生かす。*ξένων*. . . *βάσις*=*ξένοι βαίνουσι*.

10. ——: *Tra* 339. *τοῦ με τήνδ' ἐφίστασαι βάσιν*; B 2。ただし Kamerbeek *ad loc.* 参照。

11. ——: *Phi* 691*. *πρόσουρον οὐκ ἔχων βάσιν.* この *πρόσουρον* は実にむずかしく、Liddell-Scott-Jones と Webster *ad loc.* はまるで違う解釈を与えているが、とにかく B 1。

12. *ἔκλυσις*: *OR* 306. *Φοῖβος γὰρ . . . / ἀντέπεμψεν, ἔκλυσιν μόνην ἂν ἐλθεῖν τοῦδε τοῦ νοσήματος, εἰ . . . . ἔκλυσιν* は不定法 *ἐλθεῖν* の意味上の主語である対格だから A 3。これは詩語。散文に用例なし。悲劇でも、アイスキュロスの上掲 *PV* 252 とソポクレースのこの箇所のみ。*ἐκλύω, ἐκλύομαι* という動詞ならごく一般的で、現にこの『オイディプース王』でも 35 (*ἐξέλυσα*), 1003 (*ἐξελυσάμην*) にある。

13. *ἐπάρκεσις*: *OC* 447. *ἐκ ταῖνδε ἔχω . . . ἐπάρκεσιν. ἐπαρκοῦμαι* と言ってないので B 1。

14. *ἐπίστασις*: *Ant* 225. *πολλὰς γὰρ ἔσχον φροντίδων ἐπιστάσεις.* 上記と全くそっくりな例で、しかも今度は -sis が複数になっているが、*πολλὰ ἐπεστάθην* と言っていない(韻律は一応度外視して)ので B 1。韻文ではこれが唯一例。

15. *ζήτησις*: *Tra* 55. *ἀνδρὸς κατὰ ζήτησιν.* C。この語は韻文ではここと、エウリーピデースにもう一箇所だけ。散文ではヘーロドトスが初出。ソポクレースとヘーロドトスはほぼ同時代人である。

16. *ἴασις*: *El* 876. 上記 No. 5 にすぐつづく所。*τῶν ἐμῶν . . . πημάτων / ἄρηξιν, οἷς ἴασις οὐκ ἔνεστι ἔτι.* ここは写本上の問題がある所だが、我々は頑に OCT に従うことにして A 1。

17. *κατάστασις*: *Aj* 1247. *κατάστασις γένοιτ' ἂν οὐδενὸς νόμου.* A 1。アイスキュロスの No. 7 の場合と同様非人称のおかげで表現が強烈になっている。

18. *κρίσις*: *El* 684. *δρόμον, οὗ πρώτη κρίσις.* A 1。

19. ——: *OR* 501*. *κρίσις οὐκ ἔστιν ἀληθῆς.* A 1。

20. *κτῆσις*: *Tra* 230. *κατ' ἔργου κτῆσιν. κτῆσις=κτῆμα=τὸ ἔργον ὃ κέκτημαι.* それに *κατά* がついて C。

21. *λῆψις*: fr. 239. *ἥδιστον δ' ὅτῳ / πάρεστι λῆψις ὧν ἐρᾷ καθ' ἡμέραν.* A 1。

22. *λύσις*: *Ant* 597*. *οὐδ' ἔχει λύσιν.* B 1。

23. ——: *El* 573. *οὐ γὰρ ἦν λύσις / ἄλλη*. A 1.

24. ——: *OR* 921. *ὅπως λύσιν τιν' ἡμὶν εὐαγῆ πόρῃς*. B 2.

25. ——: *Tra* 1171. *μόχθων τῶν ἐφεστώτων ἐμοὶ λύσιν τελεῖσθαι*. B 2.

26. *μάθησις*: *El* 1032. *ἀλλὰ σοὶ μάθησις οὐ πάρα*. もしこれだけだったら、これが clause 相当句の -sis 名詞であるかどうか疑わしくもあろうが、実はこれは *σοὶ γὰρ ὠφέλησις οὐκ ἔνι* という前行のアンティゴネーのせりふに対するクリューソテミスの返事であって、両者は勿論対照している。そしてこのアンティゴネーのせりふは問題なく A 1 だから、クリューソテミスの方も A 1 である。

27. *μετάστασις*: *Ant* 718. *εἶκε θυμοῦ καὶ μετάστασιν δίδου*. これは *θυμῷ* を補って、*θυμός* に *μετάστασις* を与えよ、と言っているので B 1。

28. *τίσις*: *OC* 1329. *τῷδ' ἀνδρὶ τοὐμοῦ πρὸς κασιγνήτου τίσιν*. C.

29. *φεῦξις*: *Ant* 361*. *Ἅιδα μόνον φεῦξιν οὐκ ἐπάξεται*. B 2。これは全くの hapax. ホメーロスに *φύξις* という形で 3 回現れるが、それが全部『イーリアス』第 10 巻(311=398, 447)というのは意味ありげである。

30. *φθόνησις*: *Tra* 1212. *φορᾶς γέ τοι φθόνησις οὐ γενήσεται*. A 1。

31. *ὠφέλησις*: *El* 1031. 上記 No. 26 参照。A 1。

32. ——: *OC* 401. *ἡ δ' ὠφέλησις τίς θύρασι κειμένου*;「国の外にいる(私の) *ὠφέλησις* とは何か」とは「国の外にありながら、わしが何の役に立つのだ。」A 1。

以上 23 語 32 箇所。ソポクレースの -sis 名詞は全部で 56 語 151 箇所だから、clause 相当句を作る -sis 名詞は全用例中 21% ということになり、その内訳は A 1=13, A 3=1, B 1=6, B 2=8, C=4 である。

ここに採用しなかった語を列挙すると、——*ἄλγησις* (*Phi* 792), *ἄμβασις* (*OC* 1068*), *ἀνακίνησις* (*OR* 727), *ἀνάστασις* (*Phi* 276)[10], *βάξις* (計 7 箇所、すべて具体的な言葉、噂、評判、知らせ)、*βάσις* (Nos. 9–11 に引用した以外の箇所計 9), *γένεσις* (*Tra* 380)[11], *δόκησις* (*OR* 681*, *Tra* 426, 427)[12], *δόσις* (*OR* 1518), *εἰσοίκησις* (*Phi* 534. hapax), *ἐνθάκησις* (*Phi* 18. hapax), *ἐπανάστασις* (*Ant* 533. hapax poet.), *ἐπίκτῆσις* (*Phi* 1344. hapax), *κερτόμησις* (*Phi* 1236. hapax), *κρίσις* (*Tra* 266, *Phi* 1050)[13], *κτῆσις* (上記 No. 20 以外の 4 箇所), *μάθησις* (*Tr* 450, 711), *νέμεσις* (4 箇所), *ξενόστασις* (*OC* 90, fr. 258), *οἴκησις* (*Ant* 892, *Phi* 31)[14], *ὄνησις* (4 例), *πρᾶξις* (9 例),

πρόσοψις (*Aj* 70), *πρόφασις* (*Phi* 1034, *Tra* 662*), *σκῆψις* (*El* 584), *στάσις* (*OR* 634, *Tra* 1179, *OC* 1233*), *τάξις* (*Aj* 4, *OC* 1131), *τέρψις* (10 例), *τίσις* (*Aj* 406, *OC* 229), *φρόνησις* (*OR* 664*, *Phi* 1078), *φύσις* (35 例)。

5

終りにエウリーピデース。

1. *ἄθροισις*: *Hec* 314. *ἤν τις αὖ φανῇ / στρατοῦ τ' ἄθροισις πολεμίων τ' ἀγωνία*. A 2.

2. *αἵρεσις*: *And* 384. *πικρὰν κλήρωσιν αἵρεσίν τέ μοι βίου καθίστης*. B2.

3. *αἴσθησις*: *El* 290. *αἴσθησις γὰρ οὖν / κἀκ τῶν θυραίων πημάτων δάκνει βροτούς*.「他人のでも *πήματα* の *αἴσθησις* が人々をさいなむ」「他人の *πήματα* でも *αἰσθάνω* すれば苦しい」B 2。

4. *ἅλωσις*: *Hec* 1135. *ὅποπτος ὢν δὴ Τρωικῆς ἁλώσεως*. *ἁλώσεως* は *ὅποπτος* にかかる属格で「トロイアが陥ちるのではないかと思って」B 4。

5. ——: *El* 1024. *πόλεως ἅλωσιν ἐξιώμενος*. B 2.

6. *ἀναίρεσις*: *Sup* 18. *οὐδ' ἀναίρεσιν δοῦναι θέλουσι*. *ἀναίρεσις* がここでどこまで概念化されているのかが分らないが、*ἀναιρέω* (実際には中動相 *ἀναιροῦμαι* の方が多用される) を避けて *ἀναίρεσιν δοῦναι* としているので B 1。

7. ——: *Or* 404. *φυλάσσων ὀστέων ἀναίρεσιν*.「*ὀστέα* を *ἀναιροῦμαι* する時を待ち受けていたら」B 2。

8. *ἀνάπαυσις*: *Hip* 190. *κοὐκ ἔστι πόνων ἀνάπαυσις*.「*πόνοι* が *ἀναπαύω* することがない」ので A 1。

9. *ἀνάστασις*: fr. 340.3. *εἰς ἀνάστασιν δόμων περαίνει*.「*ἀνιστημι* するに至らしめる」B 3。

10. *ἀνεύρεσις*: *Io* 569. *ἐς μὲν σὴν ἀνεύρεσιν θεὸς . . . ἔκρανε*.「お前を首尾よく *ἀνευρίσκω* させて下さった」B 3。

11. *ἀπόδειξις*: *Hip* 196. *διὰ . . . οὐκ ἀπόδειξιν τῶν ὑπὸ γαίας*. *τῶν ὑπὸ γαίας* という属格を伴っているだけ概念化は乏しいわけで、「*ἀποδείκνυμι* されないのでは」で C。

12. *ἀπόστασις*: *Hip* 277. *ἀστεῖ γ' εἰς ἀπόστασιν βίου*. C。韻文での唯一例。

13. *διάλυσις*: *Pho* 435. *ἔς σε τείνει τῶνδε διάλυσις κακῶν.* A 2.

14. *δίδαξις*: *Hec* 601. *ἔχει. . . δίδαξιν ἐσθλοῦ.* B 1. プラトーン以前ではこれが唯一の例。

15. *δόκησις*: *Hed* 746. *ἔστιν δ' ἐν ὄλβῳ. . . / εὐψυχίας δόκησις.*「*ὄλβος* な者は *εὔψυχος* だと思われるものだ。」A 1。

16. ——: *Io* 1602. *ἵν' ἡ δόκησις Ξοῦθον ἡδέως ἔχῃ.* この *δόκησις* とは具体的には、よい子を得たと信じることで、それがクスートスを *ἔχω* するとは、クスートスにそう信じさせること。A 2。

17. *εἴσοψις*: *El* 1085. *τὰ γὰρ κακὰ παράδειγμα τοῖς ἐσθλοῖσιν εἴσοψιν τ' ἔχει.* 先例が *εἴσοψιν* を持つ、とは「注目される」ことで B 1。韻文散文を通じて前4世紀初までの唯一例。

18. *ἔκβασις*: *Med* 279. *κοὐκ ἔστιν ἄτης. . . ἔκβασις.* 要するに *ἄτη* から *ἐκβαίνω* することができないということで A 1。

19. *ἔκθεσις*: *Io* 956. *οὐδὲ ξυνῄδει σοί τις ἔκθεσιν τέκνου*; *ἔκθεσις τέκνου* という成句があって、ここもそう読むべきならば、これを取上げるには及ばないが、「子を捨てたこと」と読めば B 2。

20. *ἔκπληξις*: *Hel* 549. *ἔκπληξιν ἡμῖν ἀφασίαν τε προστίθης.* B 2.

21. *ἐπαίνεσις*: *Tro* 418. *Ἀργεῖ' ὀνείδη καὶ Φρυγῶν ἐπαινέσεις / . . . παραδίδωμι. ὄνειδος* も *ἐπαίνεσις* も複数になっているが、特に *ἐπαινέσεις* の方は「ほめ言葉」であるよりは「ほめてばかりいること」と覚しいので B 2。

22. *ἐπάρκεσις*: *Hec* 758. *τίν' ἡμᾶς εἰς ἐπάρκεσιν καλεῖς*; B 3.

23. *ζήτησις*: *Cyc* 14. *σέθεν κατὰ ζήτησιν.* C.

24. *ἵξις*: *Tro* 396. *καὶ τοῦτ' Ἀχαιῶν ἵξις ἐργάζεσθαι.*「アカイア人が来たことが. . .」A 2。前4世紀初までこの箇所の他にこの語の用例なし。

25. *κλήρωσις*: 上記 No. 2 を参照。

26. *κλίσις*: *Tro* 113. *δύστηνος ἐγὼ τῆς βαρυδαίμονος / ἄρθρων κλίσεως, ὡς διάκειμαι, νῶτ' ἐν στερροῖς λέκτροισι ταθεῖσ'.*「運命の重さにひしがれて手足を横えているみじめな私」D。

27. *κρίσις*: fr. 1036. *φράζε σὴ γὰρ ἡ κρίσις.* A 1. エウリーピデースにはこの他に5例の *κρίσις* が現れるが、そのすべてが「パリスの審判」というのは甚だ目立つ。

28. *κρύψις*: *Bac* 955. *κρύψῃ σὺ κρύψιν ἥν σε κρυφθῆναι χρέων.* B 2。Dodds *ad loc.* 参照。

29. *μάθησις*: *Sup* 419. *ὁ γὰρ χρόνος μάθησιν . . . δίδωσι.* B 2.

30. ——: —— 915. *διδάσκεται / λέγειν ἀκούειν θ' ὧν μάθησιν οὐκ ἔχει.* B 1.

31. ——: fr. 910*. *ὄλβιος ὅστις τῆς / ἱστορίας ἔσχε μάθησιν.* B 1.

32. *μετάστασις*: *Hec* 1266. *πῶς δ' οἶσθα μορφῆς τῆς ἐμῆς μετάστασιν*; B 2.

33. *ὄνησις*: *Alc* 334. *τῶνδ' ὄνησιν εὔχομαι / θεοῖς γενέσθαι.* A 3.

34. ——: *Med* 254. (ここはあなたのお父様のお国だからお父様のお館もあれば) *βίου τ' ὄνησις καὶ φίλων συνουσία.* A 1.

35. ——: —— 618. *κακοῦ γὰρ ἀνδρὸς δῶρ' ὄνησιν οὐκ ἔχει.* B 1.

36. ——: *Hip* 756*. *ὦ λευκόπτερε Κρησία / πορθμίς, . . . / ἐπόρευσας ἐμὰν ἄνασσαν ὀλβίων ἀπ' οἴκων, / κακονυμφοτάταν ὄνασιν.* これは甚だ訳しにくい文章だが、要するに「汝は私たちのお妃を仕合せなお家から、不幸に終る婚姻を楽しむように、船よ、お運びしたのだな」という意味で、*ὄνασιν* は我々の俗な理解によれば前の全文と同格、Barrett *ad loc.* によれば 'internal' accusative (恐らく Barrett の理解は正しい。さもないと *οἴκων* の所で文が一旦切れてしまう)。こういう対格のための分類を我々は用意していなかったが、意味の上から B 2 としておいて、そうひどい誤りにはならないだろうと期待する。

37. ——: *Hec* 1231. *χρυσοῦ τ' ὄνησις οἴχεται, παῖδές τε σοί.* A 2.

38. *ὄψις*: *Med* 173*. *πῶς ἂν ἐς ὄψιν τὰν ἁμετέραν / ἔλθοι . . .*; B 3。*ἐς ὄψιν* ～ という句はエウリーピデースには多く、この他 *Mea* 775 (*ἐλθεῖν*), *El* 1237* (*ἐς φανερὰν / ὄψιν βαίνουσι βροτοῖσιν*), *IT* 902 (*ἐλθόντας εἰς ὄψιν φίλων*), *id.* 1212 (*μηδέν' εἰς ὄψιν πελάζειν*), *Or* 513 (*ἐς ὀμμάτων μὲν ὄψιν οὐκ εἴων περᾶν*), *Bac* 1257 (*τίς αὐτὸν δεῦρ' ἂν ὄψιν εἰς ἐμὴν / καλέσειεν . . .*;), *IA* 998 (*σὴν παῖδ' ἔξαγ' ὄψιν εἰς ἐμήν*) みな同類である。またこの句以外で用いられている *ὄψις* は 31 例、全部ここでは採用しない。

46. *παραίνεσις*: *Hel* 316. *ἐς ποῖον ἕρπεις μῦθον ἢ παραίνεσιν*; B 2.

47. *πρόσοψις*: *And* 685. *εἰς πρόσοψιν τῆς ἐμῆς ἐλθῶν.* B 3.

48. ——: *Or* 1021. *ὡς σ' ἰδοῦσ' ἐν ὄμμασιν / πανυστάτην πρόσοψιν ἐξέστην φρενῶν.* B 2.

49. *πρόσρησις*: *Hel* 1166. *ἕνεκ' ἐμῆς προσρήσεως.*「私が御挨拶できますように」で C

50. ——: *IA* 341. *διδοὺς πρόσρησιν ἑξῆς πᾶσι.*「誰にでも次から次に話し

かけ」と B 1

51. *σύγχυσις*: *IA* 354, 1128, fr. 606. いずれも、*σύγχυσιν εἶχες* (*ἔχοντες*, *ἔχει*) という句をなして「取り乱す」の意。B 1。

54. *σύμβασις*: *And* 423. *εἰς ξύμβασιν δὲ χρῆν σε παῖδα σὴν ἄγειν*. B 3.

55. ——: *Sup* 739. *Ἐτεοκλέους τε σύμβασιν ποιουμένου*. B 1.

56. ——: *Pho* 85. *δὸς δὲ σύμβασιν τέκνοις*. B 1.

57. ——: —— 587. *καὶ ξύμβασίν τιν' Οἰδίπου τέκνοις δύτε*. B 1.

58. *συνάντησις*: *Io* 535. *τίνα συνάντησιν*; この前後は (529–562) いわゆる 'antilabae'、つまり iambos の1行を2人の人物の丁丁発止の問答で2分している箇所で、従って文章は簡潔で省略が多い。*τίνα συνάντησιν*; とは「どのような出逢い(をした者のこと)をか」ということで、それは「どういう出逢い方をしたのがそう (とは「あなたの息子」) だというのか」ということ。不定法の意味上の主語としての対格に準じるが故に A 3。なおこの語を韻文で使用したのはエウリーピデースのみ。

59. *τέρψις*: *Cyc* 522. *μέγιστος* (sc. *θεὸς*) *ἀνθρωποῖσιν ἐς τέρψιν* (sc. *εἶναι*) B 3。

60. ——: *Mea* 202*, *And* 94, fr. 897.5 はいずれも *τέρψιν ἔχει*(*ν*) という句をなして B 1。

63. ——: 以上の他、*ἐς τέρψιν εἶμι* (*IT* 797), *ἐς τέρψιν ἦλθες* (*Pho* 195) は B 3。

65. ——: さらに *τέρψιν λάβω* (*Pho* 316), *σοι τέρψιν ἐμβαλῶ φρενί* (*Tro* 635) という句もある。B 2。

67. *τίσις*: *Hel* 1013. *τίσις τῶνδ' ἐστὶ τοῖς τε νερτέροις / καὶ τοῖς ἄνωθεν πᾶσιν ἀνθρώποις. τῶνδε* というのが何を指しているのかは明確でないけれども、恐らくこれ以前の文章で言われたことども、つまり、何かなすべきことをなさずにいる (いた) こと。*τίσις* は報酬、仕返しだから「罰」と訳して構わない。「地下の (死者) でも地上の (生者) でもすべての人間には義務怠慢の罰がある。」つまり、「およそなすべきことをなさない人間は、今生きている者であれもう死んでしまった人間であれ、罰を受けるものなのです」A 1. Dale *ad loc.* を参照。

68. *ὑπόμνησις*: *Or* 1032. *ἐς δάκρυα πορθμεύουσ' ὑπομνήσει κακῶν*. *ὑπόμνησις* を与格にして「思い起させることによって。」このように前置詞を伴わずに手段の与格によって副詞節相当句を構成するというやり方は、散文で大変

盛になる。C。

以上36語68箇所がエウリーピデースの clause 相当句に用いられた -sis 名詞である。彼が用いた -sis 名詞の総計は82語338箇所だから、clause 相当句 -sis 名詞の比率は全体の約20% ということになる。内訳は A 1=7, A 2=5, A 3=2, B 1, B 2, B 3 いずれも 16, B 4=1, C=4, D=1 である。

ここに取上げなかったエウリーピデースの -sis 名詞を列挙する。——*ἄησις* (*Rhe* 417), *αἵρεσις* (*IA* 1364)[15], *ἀξίωσις* (fr. 15.4. hapax poet.), *ἀπόκρισις* (fr. 977), *ἀπόλαυσις* (*HF* 1370, *IT* 454, *Hel* 77。詩では他に用例なし)、*βάξις* (すべて6箇所)、*βάσις* (すべて10例。詩語)、*βρῶσις* (fr. 472.19), *γένεσις* (fr. 472.17), *δέξις* (*IA* 1282)[16], *διάγνωσις* (*Hip* 696, 926), *δόσις* (4例)、*δύνασις* (4例。詩語。散文の*δύναμις*), *ἔσβασις* (*IT* 101), *ἔκβασις* (*Med* 279)[17], *ἔμβασις* (*Bac* 740), *ἐνθύμησις* (fr. 246.2), *ἔνοσις* (*Hel* 136*), *ἔπαλξις* (すべて5例)、*ἐπίδειξις* (*Pho* 871. 散文語)、*ἔφεξις* (fr. 599), *ἱππόστασις* (*Alc* 593, fr. 771.5. 他に用例全くなし)、*κατάλυσις* (*El* 393), *κατάστασις* (4例)、*κρᾶσις* (fr. 779.2), *κρίσις* (No. 27 参照)、*μετάστασις* (*And* 1003, *IT* 816, fr. 554), *νέμεσις* (*Or* 1362*, fr. 1040.4), *ξένωσις* (*HF* 965), *οἴησις* (fr. 643. 散文語)、*οἴκησις* (fr. 487), *ὄνησις* (*IT* 579, *Bac* 473, fr. 61), *ὄψις* (No. 38 参照)、*πρᾶξις* (5例)、*προσάμβασις* (5例。梯子を意味する詩語)、*πρόσβασις* (*El* 489, *Pho* 181), *πρόσοψις* (*Hel* 636, *Or* 388, 952), *πρόφασις* (9例)、*ῥῆξις* (*Pho* 1256), *σκῆψις* (7例)、*στάσις* (10例)、*σύνεσις* (8例。うち *Or* 396 は「良心」という意味での初出)、*σύστασις* (*Hed* 415, *And* 1088, *Hip* 983), *τάξις* (15例)、*τέρψις* (Nos. 60–66 のように句を成さぬ場合5例)、*τήρησις* (fr. 162.2), *ὑπόστασις* (*Bac* 749. 詩では他に用例なく、散文でも稀語)、*φρόνησις* (*Sup* 216, fr. 739.2. 詩では稀)、*φύλαξις* (*Hel* 506), *φύσις* (64例)。

6

まずはじめに、今まで見て来た3人の悲劇詩人の、clause相当句に用いられた -sis名詞の種類を、表にしてまとめてみよう。ついでにホメーロスのそれも一緒に表にしておく。

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C	D
ホメーロス『イーリアス』	17 14	0	0	3 1	5 2	0	0	3 0	0
ホメーロス『オデュッセイアー』	3	0	0	2	3	0	0	3	0
アイスキュロス	5	0	0	1	11	2	0	2	0
ソポクレース	13	0	1	6	8	0	0	4	0
エウリーピデース	7	5	2	16	16	16	1	4	1
計	42	5	3	26	40	18	1	13	1

この表を見てすぐ分ることは、各作家によって数にかなりのばらつきがあるけれども、合計するとA1とB2が抜群に多いということだろう。差当り問題なのは、その「ばらつきがあるけれども」ということである。ばらつきがあるから合計など出してみることには大した意味はないととるべきか、ばらつきがあるけれども合計するとこうなって、これに意味があるととるべきかである。前者の見解の根底には、-sis 名詞の用法(そして恐らく一般に抽象名詞の用法)などというものは、作家それぞれの個性や好みによるのであって、それ以上に何か一般的な説明を与えようとするのは間違いである、という認識があるだろう。そしてこういう考え方を全面的に否定することはできない、つまりこの考え方には少くとも一部の真理があると認めないわけには行かない[18]。

この場合散文を参照することが有益であるか無益であるか——いずれにしても今悲劇詩人についてやったように、一つ一つの用例を検討することはここではできないが、凡その所は示すことができ、それを参照することは無駄ではないと信じる。

散文の中でも一番詳しく知りたいいわゆるソフィストについては、余り多くを知ることができない。Diels-Kranz, *op. cit.*, Band II の巻末が唯一の典拠だが、そこで見出される -sis 名詞は28語しかなく、それも1人のソフィストのでなく、プロータゴラース、ゴルギアース、ヒッピアース、プロディコス等々数人の文章から採られたものであり、その上、この半数は Diels-Kranz の A、つまり他の著作家による引用 (それも quotation ではなく citation) からのものである。そして、我々が調査の対象としている clause 相当句を形成する -sis 名詞というとまたまた数が限られて、この数を数えることに意味があるかどうかも疑わしい。言えることは、A1とB1とCが幾つかづつ、あとはなし、ということで、この三つの中ではCが一番多いとだけつけ加えておこう。

ヘーロドトスやトゥーキューディデースについては、もっとはっきりしたことが言えるだろう。ヘーロドトスで最も多い、それも断然他を圧して多いのはC である。その次が A3 と B1 でこれはほぼ同数。しかし、その次に多いと

言っても、A 3 は C の半数以下である。そして以下 A 1 (これは A 3 の 8 割位)、B 2、B 4 という順序となる。そして非常に面白いのは、ヘーロドトスとあれだけ文体の違うトゥーキューディデースでも、C が最も多くて次が A 3、B 1 だという点はヘーロドトスと同じだということで、これは覚えておく価値がありそうである。

所が C が最も多いというのはプラトーンでもそうである。次が B 1、次が B 2、次が A 1 となる。

そこでどうなるか。詩人の場合と対比してみると、少くとも次の 2 点は確実なこととして言える。第 1 は、詩人にあっては数にかなりのばらつきがあったにせよ、合計すれば A 1 の用法が最も多かったのに対して、散文作家の場合は歴史家であれ哲学者であれ、A 1 が最も多いという者は一人もいない、ということ。第 2 は、詩人では殆ど目立たなかった C が散文では断然多くなった、ということである。勿論 A 1 が減ったとは言っても、これは比率の問題であって、絶対数はプラトーンの A 1 -sis 名詞は、例えばソポクレースのそれよりは遙かに多い。しかしプラトーンではそれ以外の用法の方がまた遙かに多いのである。

7

文体ということから言うならば、より一層重要なのは上記の第 1 点の方だろう。つまり、詩人たちにあっては、-sis 名詞を copula ないしはそれに近い動詞の主語として用いることが最も多かったが、散文作家では例外なくそうではない、ということである。

むしろ、考え方見方としては、詩に多かったものが散文で減ったと見るよりは、ギリシアでは散文よりはずっと歴史が古い韻文に、A 1 のような、文体という点から言うならばかなり高度な抽象名詞の使い方定行われていた、ということに驚くべきなのかも知れない。そう言えば、私にとっては -sis 名詞については幾つかの驚きがあったが、その中で、例えばホメーロスでは -sis 名詞は語りの部分よりは登場人物のせりふの部分に多いとか、悲劇では、合唱を主とする抒情的な部分よりも、役者のせりふの方に -sis 名詞が多い(註(8)参照)とかいうのは、みな意外なことだった。(両方を通じて「せりふ」に -sis が多いということは何を語るのか、これは -ia だの -ma だのをまた調べてからでなくては言えないが、とにかく何かを語っていそうだぐらいのことは予告しておい

てもいいと思う。)

A1 の用法がいろいろの効果を挙げ得る中で、やはり一番重要なのは、それが非人称の文章になるということで、そこから出て来る最も重要なことは、上に見たように、一方では一般論的な物の言い方をするということ、そして他方、そのおかげで甚だ微妙な強勢文を作ることができるということだろう。これが現存する最古の文献の中にすでにある、ということは確かに驚くべきことである。なるほど『イーリアス』の長大さを考えれば、その中で 14 箇所では 1 巻に 1 箇所にすらならず、「たったの」という形容を付するに値するかも知れない。しかしその成立の古さを考えるならば、たとえ 1 箇所でも驚くべきことだと私は思う。

今日の定説では -sis 名詞の発生は、ギリシア語ではなく、印欧語まで溯ることができるという。しかしそれはあくまでも語形、語彙についてのことであって、そういう印欧語の -sis 名詞がどういう使われ方をしていたのかは分らない。他の印欧諸語での -sis 類似名詞の用法を比較することによってある程度の推論はできるかも知れない。しかし文学語としてのギリシア語の歴史の最初に立つホメーロスですでに A1 がごく普通の用法としてすでにあることは肝に銘じておくべきで、以後散文に至って -sis 名詞はその語彙をも用法の幅をもぐっと拡げるのだが、それは -sis 名詞を前置詞の目的語とすることだったり、不定詞の主語に据えることだったり、絶対属格の中で用いることだったり、要するにすでに完成したものとしての抽象名詞を応用することでしかない。これは抽象名詞の使い方が熟したのであるよりは空間的に幅が拡がったということだろう。それに対して A1 の用法は熟した用法だろう。そうした熟した用法がはじめにいきなり出て来てしまったことに私は驚いたのである。これが例えばヘーロドトスの 8.54 でクセルクセースが、アテーナイを占領したことを知らせるために、スーサの都に騎乗の使者を送った (*Ξέρξης ἀπέπεμψε ἐς Σοῦσα ἄγγελον ἱππέα*) と書いてあって、そのすぐあとに、「その使者を送ってから 2 日目に(とは実はギリシア語の習慣ではその翌日に)」という所を *ἀπὸ δὲ τῆς πέμψιος τοῦ κήρυκος δευτέρῃ ἡμέρῃ* と書いてあるのを見れば、動詞から派生する抽象名詞の最も基本的な使い方を見たような気がするのだが[19]、我々の分類に従えばこれは C であって、散文の時代になってから大いに使われ始めた用法なのである。

しかし他方、不定詞でさえ[20]すでにホメーロスにおいて自由に文章の主語になっていることを思うならば、-sis 名詞が主語になるのは当り前のこととも思

える。そしてこれが主語ならば動詞は copula あるいは不完全動詞になるのも当然だと言えるだろう。なぜなら、もし自動詞にせよ他動詞にせよ、完全動詞であれば何らかの動作を意味するはずで、それなら -sis 名詞が何らかの動作をするという文章を書くことになって、これは擬人法である。然るに、もともと抽象名詞を 'personal' に使うということを余りやらないのがギリシア語の特徴の一つであるのに[21]、その抽象名詞が -sis ではますますそういう使い方はやりにくいはずで、だから我々の分類の A2 は A1 に比べて例が少いことになる。そして、別に抽象名詞の使い方が熟していなくてもいいのだということになる。

そこで前節はじめの表の中の数字のばらつきというのが思い出されて来る。今 A1 にのみ的をしぼって見ても、例えば同じホメーロスと言っても『イーリアス』14、『オデュッセイアー』3 というのは明白な違いである。両詩の作者が違うとか同じとか騒がれ出してからどれだけ時が流れたか。そして同じ詩人の作だと考える人でも、明白な違いというのが幾つかあることは認めているわけだが、今の -sis 名詞の使い方というような、ある意味では些細と言ってもよい点にもこうした明らかな違いがあることを知れば、やはり詩人が違う可能性を否定することは容易ではないと考えないわけには行かなくなる。悲劇詩人の中では、アイスキュロスとエウリーピデースは A1 にそれほどの関心を示してはいない。ソポクースはそれを示している。

つまりこういうことなのだ——-sis 名詞を主語として使うことそれ自体は別に文章技術の巧みさでもなければ円熟を示すものでもない、文章を作るほどの人なら誰にでもできた普通のことだったが、特にそういう構文を好む人、それの巧みな人というのがいて、そういう人がこれを使うと、我々をびっくりさせるような絶妙さを発揮することができる。

これ以上何かを言うことはむずかしい。恐らく弁論家の文章が多くの適切な材料を提供してくれるだろうと期待される。そこで次はいわゆる 'Attic orators' つまりアンティポーン、アンドキデースから始まって、リュシアース、イーソクラテース、デーモステネース、アイスキネース等について見ることになる。これには大変な量の文を読むことになるが、これらの人々の文章は、読まれるよりも先にまず聞かれることを期待して書かれたという点では叙事詩や悲劇と同じだ、という利点をもっている。

(註)

[1] Kühner-Gerth や Schwyzer の文法書は無論だが、この他に A. A. Long, *Language and Thought in Sophocles*: A Study of Abstract Nouns and Poetic Technique (London, 1968) は是非参照すべきである。表題が示すより遙かに広い範囲に眼を配っており、解釈の上でも学ぶ所が多い。また、この著者が参照した論文の中で、R. Browning, 'Greek Abstract Nouns in -sis, -tis', *Philologus* 102 (1958) は基本的な問題を扱っている。

[2] Long, *op. cit.*, 64 ff., 69, 87 参照。

[3] プラトーンについては、『書簡』と偽作、あるいは偽作を疑われているものを全部割愛した。

[4] 各作家の -sis 名詞の使いぶりを一層よく示すのは、語数よりは延べ語数、つまり何箇所で使っているかという数の方だろうから、それを掲げる。ここでも括弧内の数は、詩ならアイスキュロスを、散文ならヘーロドトスを基準にして、それぞれ何箇所で -sis 名詞を用いるはずであるかを示す目安である。例によって目安以上のものではあり得ないことは言うまでもない。

ホメーロス	132	(322)
アイスキュロス	94	
ソポクレース	151	(120)
エウリーピデース	338	(313)
アリストパネース	114	(177)
……		
ヘーロドトス	388	
トゥーキューディデース	700	(291)
クセノポーン	564	(601)
プラトーン	4,039	(1,351)

悲劇と比べればホメーロスの -sis 名詞使用頻度はかなり低い(アイスキュロスの約 40%)ということ、アリストパネースも少な目だということ、プラトーンの -sis 名詞使用頻度は抜群に高く(ヘーロドトスの 3 倍以上)、トゥーキューディデースも相当高い(ヘーロドトスの 2.4 倍)ということがまず目につく。93 頁に掲げた語数の表と対照するともう一つ目立つことがある。それはプラトーンとクセノポーンについてである。その場でも言ったように、クセノポーンはこの時代の作家としては -sis 名詞の語彙が乏しい(ヘーロドトスの 55%)。しかし使用頻度という点から見ると、相変らず少な目ではあるが、目をむくほどではない。どうしてこうなるのかと言うと——最も極端な例を一つ挙げる。『アナバシス』で使われている -sis 名詞はわずかの 17 語であるが、延べ語数(使用箇所数)は 76 である。所が、「戦列」を意味する *τάξις* が 33 箇所にも現れ、従って残りの 16 語が 43 箇所に現れるのである。『キューロスの教育』もほぼ同じで、-sis 名詞 30 語 125 箇所のうち、69 箇所すなわち過半数を *τάξις* 1 語が占めている。

プラトーンについては少しあとで紹介するが、作品ごとの -sis 名詞使用頻度にはかなりむらがあるとだけ言っておこう。概して初期の作品にはそれが少く、晩年のものには多いと言える。

[5] 語形がより一層語源に近いものは歴史的にも古い、とは必ずしも言えないということは周ねく知られた所だろう。-sis 名詞について言えば、例えば *χώρησις* は *ἀναχώρησις* や *ἀποχώρησις* よりもずっと新しい。*ἀναχ.* はヘーロドトス、*ἀποχ.* はトゥー

キューディデースに見られるが、χώρησις は紀元後3世紀が今の所知られ得る最古の使用例である。しかしこれなどは事情は単純で、なぜそうなのかの説明はすぐつく。ἀναχώρησις は χώρησις に ἀνα- をつけて造られたのではなく、χωρέω に ἀνα- をつけた ἀναχωρέω (共にホメーロスにすでにある) から派生したのである。もっとも、それでも χώρησις の出現が非常に新しいと事実は変らないわけで、なぜそうなったのかの説明を別に必要とするかも知れない。

5a) 参考までに、各作家の -sis 名詞の1語当りの使用回数を示すと次の通りである。Hom.=3.4, Aes.=2.0, Soph.=2.7, Eur.=4.1 / Her.=3.5 Thuc.=3.6, Xen. 5.9, Plat.=11.5. 散文でも歴史家はそれほど大きく詩人たちと違わないのに、プラトーンとなると大変な違いで、彼の -sis 名詞はそれだけ概念化されたものが多いということである。

6) Fraenkel *ad loc.* によれば、οὐκ ἔστ' ἄλυξις という文は『イーリアス』22.270 の οὔ τοι ἔτ' ἔσθ' ὑπάλυξις をモデルにしている。Fraenkel ほどの人が言うことなので、まず信用してかかるべきだとは思うが、主語が ὑπάλυξις と ἄλυξις、動詞が共に ἐστι、そして共に否定文、しかもアイスキュロスの ἄλυξις は後にも先にもここにだけしか使われていない語だとなれば、模倣ということを考えてもよいのだろうか。無論その可能性はある。しかしそうでない可能性もある。

7) この行数を示す数字の右肩の星印(*)は、この箇所が合唱やコンモスのような詠唱、つまり役者によるせりふの部分ではないことを示す。以下この星印つきの箇所を追って行けば分る通り、-sis 名詞はこういう歌舞よりはせりふの方に断然多いことが分る。

8) Long, *op. cit.*, 63 ff. 参照。

9) Denniston-Page *ad loc.* を参照。

10) Webster *ad loc.* はこの箇所およびすぐ前に挙げた *OR* 1518 について適切なことを述べている。このように長い綴りの抽象名詞を同属目的語として用いるのは 'emotional' な効果を生む、というのである。

11) ここでは γένεσις が γένεσιν と対格になっていて、'by birth' という意味で表れているが、こういう語法が成立するには、γένεσις がまず「生れ」という概念として完成していなくてはならない。φύσις を φύσει という与格で副詞的に使う (これは散文、とくにプラトーンに非常に多い) などというのも同断。

12) *Tra* 426 については Kamerbeek *ad loc.* を参照。

13) *Phi* 1050 については Webster *ad loc.* 参照。δικαίων κἀγαθῶν ἀνδρῶν κρίσις という句を書いた時、ソポクレースはふとアキッレウスの武具を求めての争い、ὅπλων κρίσις という句を思い出していたかも知れないと言っている。これも、そうかも知れないし、そうでないかも知れない。

14) *Phi* 31 について、Webster *ad loc.*: 'The force of the abstract is "a place where one could live."'

15) ここではアキッレウスが αἱρεθεὶς ἑκων と言ったのを受けてクリュタイムネーストラーが πονηρὰν αἵρεσιν と言っているので、この αἵρεσις には動詞的要素が多分に含まれていると考えられる一方(現に呉茂一訳では「人殺しに選ばれるとは、罪なことではございませんか」)、相手が動詞 (分詞) で述べたことを名詞に直して受けたということにはそれなりの意味があるはずで、それを読む方でも一遍動詞に還元してみるには及ばないと考えて割愛した。

16) δεξόμεθα δέξιν ἥν σε δέξαθαι χρεών. ここには勿論言葉の戯れがあり、δέξιν などという目的語はなくても意味は分る。従ってこの δέξιν は意味ではなく δεξ- という

alliteration によって聴く者の耳に切実な印象を残すために用いられたのである。

17) この ἔκβασις は「逃れること」という意味にとれそうでとれない。まず形容詞が εὔπρόσοιστος で、これは ῥάδιος とは違って εὐ-προσοιστος、つまり「近づき易い」ということ。さらに ἔκβασις は勿論のこと、動詞 ἐκβαίνω でも、(プラトーンなどは後に「魂が肉体から ἐκβαίνω する」などと言っているが)エウリーピデースの時代までは「下船する」という意味でしか使われておらず、従って今のプラトーンの例などはすべてこの語の比喩的な用法である。ここでは「容易に近づける下船地」ということだろう。

18) 抒情詩に全く眼を向けないのはやはりよくないとは思うが、抒情詩は余りにも断片的でありすぎる嫌いがある。そこで長いまとまった文が見られる二人の詩人、ピンダロスとテオグニスに眼をとめると、二人合せて、A 1=6, A 2=1, B 1=5, B 2=4, B 4=1 となる。これを上の表の計に足すと、詩では A 1=48, A 2=6, A 3=3, B 1=31, B 2=44, B 3=18, B 4=2, C=13, D=1 となる。

19) このような、まず -sis 名詞の派生源となった動詞が出て来て、その直後にそれを -sis 名詞で受ける文章が特に目立つのはヘーロドトスである。トゥーキューディデースにもこういう書き方はあるが、ヘーロドトスほどには目立たない。プラトーンにもある(恐らく誰にもあるだろう)。しかし時々あるというだけのことである。彼の場合は事件を叙述しているわけではないので少くて当然である。のみならず彼は -sis 名詞を主として概念を表す語として用いているから、-sis 名詞は単独に現れるのが普通である。この点で変わっているのがクセノポーンで、彼の文章では先に -sis 名詞が出て来て、その後にその派生源である動詞が現れるという文章がしばしばある。

20) 不定法「でさえ」というのは、不定法ももとは 'verbal noun' であったというのが誰もが認める所であっても、それは印欧語の段階においてであって、我々が知っているギリシア語ではすでに、不定法と -sis 名詞を比べれば、不定法は動詞的な度合が濃厚であり、-sis の方は名詞的度合が動詞的色合を抜いているのが事実なので、「そういう動詞的度合が強いて不定法でさえ」という意味である。

しかしこの違いは時に甚だ曖昧になることがあって、本稿のはじめでもちょっとその点に触れた(92 頁)。このことを大変みごとに示してくれる文章がヘーロドトスにあるので紹介しておくと(5. 35. 2-4)、これは OCT でわずか 14〜5 行ばかりの文章だが、そこに ἀφίστημι という動詞の不定法が 2 箇、それの -sis 名詞が 3 箇使われていて、そのうち -sis 名詞 1 箇を除けば、あとは全部交換可能である。

21) J. D. Denniston, *Greek Prose Style* (Oxford, 1952), 23 ff. 参照。我々の分類 A 1—D のうち、主語に当るのは A 1 と A 2、目的語に当るのは B 1 と B 2 なので、これを A 同志 B 同志それぞれ足し合せると、A=47, B=66 となり、その A と B をさらに足し合せると 113 で、これは詩人の clause 相当句用 -sis 名詞の 76% に当る。如何に 'verbal noun' というものは主語および目的語として用いられたかがほぼ見当がつく。と同時に A は 47 で B は 66 だというのは、やはり主語よりは目的語になる方が詩人の場合でも普通だったということである。